

項目	評価の観点	評価		項目に関する分析・意見・提言 など ○職員 ◇学校関係者（地域等）	今後の改善に向けて
		自己 (職員)	学校 関係者		
主体的・対話的で深い学び 確かな学力と個性を伸ばす教育の推進	互いに認め合う支持的風土を育てる学級・学年集団づくりに努めた。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ○前向きな発言をするように心がけている。 ○授業中、一人一人が考えを発言したり、友だちの発言を聞いて感想を言ったりする時間を多く取り入れるようにし、人に聞いてもらうことや伝え合うことの楽しさを味わえるようにしている。 ○学び合いの土台になるのは、支持的風土である。それを育てる為に学級では、ペア学習の相手、班のグループ構成や学習において意図的に組み合わせを考えたり、学び合いが機能するように考えて環境を整備したりした。その結果、友だちに自分を出せるようになったり、放課後に友だちと学習に関する自主的な学習を行ったりする姿が見られるようになった。 ○学び合いについても、スムーズに行えるようになってきている。班での意見交流の様子を見ていると、学年ごとに積み上がりを感じている。コロナでなかなか班活動ができなかったが、距離を保ちながらも可能になったとき、子どもたちの取り組み姿勢がよくなった。やはり友だちとの学び合いは大切だと感じた。 ○今年度の状況の中で学び合うコミュニケーションの取り方の難しさを痛感した。制約がある中で学び合いを取り入れた授業づくりとなったが、自分の意見を発表する場を多く持つ等、できる範囲で取り組んだ。 ○コロナ禍で、以前のようなグループ学習ができないうえ、どのようにして協働的な学びを行うかを考えた。教師がファシリテーターとなることも大切だと思う。 ○主体的に学習に取り組む態度を育てるための課題づくりに、さらに取り組んでいく必要がある。 ○「めあて」「ふり返し」を取り入れた授業づくりについては、子どもにも定着しているように感じる。 ○「主体的に学習に取り組む態度」を評価するにあたり、学習したことを『もしも自分なら…』と自分ごととして見つめ直す時間を取るようにした。今後も主体的な態度を育む課題を考えていきたい。 ○可能な限り、いろいろな学年の研究授業に参加した。 ◇コロナ禍での学級づくり・学習のすすめ方で、この一年に問題点・課題が生じたことと思う。思考検証し今後に生かしてほしい。 	○これまで本校が実践してきた「学び合い」の取り組みを継続すると共に、唐崎の児童の実態に応じた「主体的・対話的で深い学び」を育む授業を目指し、授業改善に積極的に努める。 ○これまでの取り組みで定着してきた「めあて」「ふり返し」の取り組みを活かし、児童が見通しを持って学習に取り組める授業づくりに努める。「ふり返し」から新たな「めあて」を立てたり、「めあて」の達成に向けて児童が試行錯誤できる場面を積極的に設定し、学びの深化を図る。
	協同する体験・伝え合う喜び・コミュニケーション能力の育成を図る授業の工夫改善に努めた。				
	「めあて」「ふり返し」や学び合いを取り入れた授業づくり、「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」を育む授業計画など、主体的・対話的で深い学びを追究する授業研究や研修会に取り組んだ。				
	生命を尊重する心やいじめを許さない態度などの道徳的実践力を育てる活動を工夫した。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○行事に関連して、生命やいじめに対する意識を持たせる学習の機会を効果的に確保できたように思う。 ○教科化に伴い、道徳授業がきちんとされ、学年で共通理解して実施されていたと思う。 ○取り組み内容や児童の感想を掲示しているクラスがあり、子どもたちへの意識付けにはよいと感じた。 ○教材の準備・整理もできていて定着している。 ○普段の道徳の学習で使った物や板書をデータ・資料などで残しておく。 ○保護者への授業公開ができなかったので通信を出して道徳の発信をすることも可能ではないか。 ◇いろいろなツール・手法を活用し、社会や特に保護者の道徳心の向上に学校からの発信が望まれる。 	○道徳の教科化に向けて以前から職員研修は行っていたが、より充実した道徳の学習となるよう、校内研修を実施するとともに校外への研修にも積極的に参加し、教師個々の力量を高める。 ○画像、板書、プリントなど、データで残して共有できるものをライブラリ化して保存、共有していくように進めていく。 ○今年度は道徳参観を実施できなかったが、今後は、学年通信や学校HPを通して、道徳の学習の様子を保護者や地域に発信していく。 ○大津市の道徳研究部会の先進的な取り組みを、校内にも推進していく。
	道徳科の教材、評価に関する研究を行い、資料の整備・交流に努めた。				
	道徳科の時間を公開するなど、保護者や地域との連携も視野に入れて道徳教育に取り組んだ。				
	たくましい心と体を育てる魅力ある授業の工夫改善に努めた。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ○コロナ禍で様々な制約がある中においても、例年行ってきた活動を可能な限り実施し、運動に親しむ機会に努めた。スーパートライに積極的に参加することで身体を動かす心地よさを味わい進んで体を動かそうとする意欲の育成につながった。 ○コロナ禍の厳しい状況の中、体育参観等に向けて授業改善に取り組んだ。今後は、指導要領の内容に合わせて、指導内容を改善していきたい。 ○コロナ禍の中でも感染対策をしながらできることを考えて行事等を提案することができた。また業間休みに体を動かす機会が少ないので、何か案間に行え、感染対策がとれるものを企画したい。 ○この大会については指導要領に沿った内容に変更してはどうか。設定距離が適切でない学年がある。 ○コロナ禍の中で実施可能な方法や内容について学校全体で考えるべきだと思う。 ○体力向上にむけて、年間を通して短縄に取り組む児童が増えた。スーパートライなどで子どもたちが運動に取り組めるような提案・取り組みができてきていると思う。 ○休み時間、外で遊ぶことをすすめている。 ◇制約が多い中で独自の取り組みを積極的にされている様子が見える。 	○児童の体力向上のために、今後も継続して運動に親しむための取り組みを工夫して行う。 ○学習指導要領の内容を基に、体育的行事や取り組みがよりよいものとなるよう、改善を図る。 ○体育科の指導内容を工夫し検討する機会をもち、系統立てたカリキュラムの作成、改善や授業改善に努める。 ○今年度の取り組みを基に、コロナ禍での体育的行事の在り方を工夫する。
	ランラン月間、体育の宿題、チャレンジランキングなど、運動に親しむ環境づくりや体力づくりを推進する運動実践に努めた。				
	体を動かす気持ちよさを体験させ、進んで体を動かそうとする意欲の育成に努めた。				
	指導体制・指導方法の工夫改善に努め、学力向上を目指した。	B	A	<ul style="list-style-type: none"> ○1学期は、学校での学習に限られた時間の中でのものだったため、家庭の取り組みによって学力差が大きくなった。3月までに、今年度の学習内容が定着するように努める必要がある。 ○コロナ禍で何かと制約のある中、担任間で協力・役割分担してできる限りの活動を考えている。 ○新学習指導要領に合わせて、教える授業から「考えさせる授業」にする為、「自ら課題をもって取り組む方法」や「児童が考えなくなる、挑戦しなくなる言葉かけ」に努めた。 ○体校からスタートした1学期は、体校中に広がった学力差が少しでもなくなるような指導を心がけた。2学期は、基礎基本だけではなく、単元終わりに応用問題にも取り組んだが、既習事項が定着していないことでますます子どもも見られた。応用問題などで学び合うことも大切だが、基礎基本の学習や今までの学年の復習も取り入れていく必要がある。 ○学校全体の学習のきまりは共通理解されているが、どこまで共通実践がなされているかの検証も必要。 ○OJTの一環として、メンター・メンティー制度に教育実習生を受け持った時の資料などを再活用した。 ○OJTの立場で、集団での研修ではなく、ペアでの活動をスタートした。互いに学ぶ姿勢を大切にできるようペア活動が習慣化できるよう努めていきたい。 ○役割分担は学校として出来ていると思うが、分掌によって、仕事量にかなりの差がある。 ○ICTの活用では、使用方法を聞かれることが多いので分かる範囲内で活用方法や有効な点を伝えた。 ○デジタル教科書が入ったので、情報部で協力し各教室で活用できるようにした。 ○考え方において先生の個性（考え方）にいろいろ工夫されている様子が見られた。「私ならこう考える」という姿勢が、子どもたちの自主性を生み出しているように思われた。 ◇体校や日々のコロナ対処で制約がある中で、組織的・計画的に指導力向上に取り組まれていることを評価したい。 	○ベーシックタイムやガッテンプリントを計画的に活用し、基礎基本の定着を図る。 ○発展的な課題に取り組む機会を意図的・系統的に設定し、学ぶことの楽しさを味わわせる授業作りに努める。 ○研修会やOJTの取り組みを活性化させ、組織的に指導力向上を図る。 ○学習指導要領のねらいに即したものと異なるよう学校行事を精選し、授業改善のための教材研究や指導力向上のための研修等を実施できる環境を整える。 ○教員の勤務状況の改善については、本年度は日課表を見直し、放課後の事務時間を昨年度より多く確保した。 ○朝の児童の登校時刻を遅くしたことで、教員が朝の勤務時間外に出勤せざるを得ない状況を若干改善した。 ○来年度以降も会議の精選や情報システムの効果的な活用をすすめ、勤務の負担軽減を進めていく。
学校全体として指導力・教育力の向上を目指し、職員研修に努めた。					
働き方改革や教育活動の質の改善に向け、計画的な準備・役割分担・ICT活用などの取組に努めた。					
家庭・地域との連携 保幼小中の連携	保護者との個別相談や必要に応じて関係機関との連携を図り、子育てに対する積極的な支援に努めた。 保護者・地域との交流や情報発信、参観、懇談会の実施や地域人材の活用に努めた。 家庭・地域と連携しながら、防犯・防災教育の推進、感染症対策の推進を図るため、メール配信やホームページなどを活用して情報発信をし、安心・安全な学校づくりに努めた。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○不登校傾向の子や虐待ではないかと心配な子について、迅速に対応したり声をかけたりして、子や親への支援をきめ細やかに行えた。 ○学校だけでや生徒指導だけでなく、学校の方針を示す機会を増やした。 ○コミュニティスクール等により、SDGs授業等、地域人材活用を努めた。また、コロナ禍におけるトイレ清掃等において、PTAの方に支えていただいた。より活性化させた。 ○課題のある児童に対して担当者を中心に見立てを行い、積極的に他機関との連携を深めることができた。 ○いじめの定義や対応については入学説明会や年度当初のお便りや学級懇談会で情報発信することで、学校の取組や対応について理解を促すことができる。 ◇非接触が求められる中、ツール・手法を用いて情報発信に努めてほしい。それによって保護者の安心・信頼に結びつく。 	○不登校傾向があるなど個別に対応を要する児童に対しては、担任とともに個々の課題を適切に捉え、早期にSC・SSW・他機関などにつなぐことで対応が概ねできている。それでも対応しきれていないケースに対して、専門的な立場の方からの助言を受けながら課題解消に向けて対応を進めていく。 ○地域人材の活用については、今年度と同じ情勢なら例年通りの学習活動の実施は難しい。その方法については、地域の声聞きながら、可能なことから少しずつ実施していく。 ○今年度は学習参観等保護者に来校してもらう機会が持てなかった。この状況が続くようなら、学校の様子を発信していく方法を工夫する必要がある。学校だけでなくHPのほか、学年通信にも積極的に情報発信に努めていく。
保幼小中の連続性を意識し、子どもの校種間交流や教師の出前授業などの具体的な連携に努めた。					
唐崎人権教育研究会（唐教研）など、保幼小・小中の校種の枠を超えた合同研修会を実施した。また、保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の授業公開に努めた。					
保幼小連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。	D	C	<ul style="list-style-type: none"> ○予定していた交流活動や連携事業などが、コロナの影響を受けたため実施できなかった。 ○学校や学区の現在の状況に合わせて保幼小中連携事業の内容等を見直した。幼小連携についてはスタートカリキュラム等も作ったので（コロナ禍では難しかったが）今後実施させていきたい。 ○今年度唐教研の集会在少なかった。 ○唐教研を通して中学校との連携を深めることができた。 ○唐教研の内容を精査することで、よりよい保幼小中連携の在り方を追求し、共通理解のもと実践することができると思う。 ○コロナ禍の中、出来る限り努めたとは思。この機に意義や目的を再度見直し、新たな体制をつくってよいと感じる。 ◇保育園、幼稚園からは唐崎小学校との交流についてお話しは聞いている。コロナ禍で実現できなかったことはやむを得ない。 ◇コロナ禍のもと、やむを得ない。終息が見通せない中、次年度は内容・有り様の検討が求められる。 ◇コロナが落ち着いた後の体制運営に期待しています。 	○保幼小連携の具体的な実践は取り組みなかった分、教職員間の連携はこまめに行い、また、幼小におけるスタートカリキュラムを充実させていく。 ○来年度の新入生に対しては、教員が在籍園へ向向き、園児観察と聞き取りを丁寧に行うことで入学に向けての準備、対応を進めていく。 ○小中連携については、次年度以降も出前授業や小中連絡会を実施する予定である。 ○唐教研を中心とした小中連携事業を次年度は充実させていく予定である。 唐教研の各部会を、本校の校内組織と連携させることで、保幼小中の育ちを一層意識した教育活動を展開していく。	
保幼小中連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。					
保幼小中連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。					
生徒指導体制の充実 組織体制の充実	日ごろから子どもとの関わりを意識的に高め、子どもが気軽に相談できる雰囲気づくりなど、諸課題の早期発見、日常的な予防指導に努めた。 問題行動や不登校などの課題に対して、学年・担当と共に組織的な指導・支援ができた。 あいさつ運動、子どもくらしのやくそく、いじめ対応など、家庭・地域・関係機関との連携による指導に努めた。	A	A	<ul style="list-style-type: none"> ○子どもとの関わりを意識的に高め相談しやすい雰囲気づくりのころでは、もう少し努力が必要。学年で学級経営についてなど話し合える時間があるとうい。 ○朝夕の昇降口は子どもの心の声が届きやすく早期発見に役立つと感じる。 ○教師の、子どもの呼び方については共通理解が必要。 ○子どもたちの問題行動や心配なことについて教師間の話しやすい雰囲気づくりの醸成を大切にしていきたい。 ○問題行動やいじめ対応など学年で対応マニュアルを見直し、共通理解する機会がありよかった。 ○担任と担当との連携がスムーズで、かつ、役割分担が明確であると、よりよい対応ができた。 ○ここ数年で学校としての指導支援体制が確立されつつある。今後も日々確認・更新していくことで定着を図り、子どもの安心できる学校づくりに努めたい。 ○いじめ問題で手厚い聞き取りの大切さは理解しているが、そのための十分な時間確保が難しい。 ○教育相談的なこと、いじめのことは学年でよく相談でき、担任一人で抱えない風土があるので心強い。 ○事態や方針を共有できていないこともあり、また、共有の次に「実行」「確認」まで学年を単位で行えるようにしたい。 ○「はまっ」と「ハートプロジェクト」が定着し、児童中心の取り組みができるようになった。 ◇学校のこまやか対応が保護者や児童のアンケート結果に高い肯定的評価となっていると思われる。 	○学年会の時間枠を設けてはどうか。実施の有無は学年で判断。 ○事案が発生しないような、未然防止に役立つような学級経営の方法を共有する時間を設ける。 ○教師が「さん」づけで児童を呼ぶことを検討していく。子ども同士に相手を思いやる指導をしていることを重視する。 ○聞き取りや指導の際、対応に見通しをもち計画を共有してから行う。 ○言葉遣いについて発達段階に応じた指導を行う機会を設ける。 ○教師から元氣よく大きな声で挨拶を行う。
保幼小中連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。					
保幼小中連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。					
特別支援教育の充実	支援を要する児童の個別の指導計画を作成・活用し、支援に努めた。 組織的・計画的な特別支援教育の体制づくりに努めた。 巡回相談などを活用し、関係機関と連携した相談体制の充実に努めた。	B	B	<ul style="list-style-type: none"> ○担任と特別支援コーディネーター、子ども支援コーディネーターが密に連携をとり合い、よりよい支援体制の整備に努めたい。 ○学習室での支援を中心に学習支援・登校支援に努め、安心して学習できる児童が増えた。 ○巡回相談は、子どもの支援についてたくさんの示唆を受けることができた。 ○就学指導委員会を計画的に持つ必要性を感じた。 ◇外部の専門員、機関を活用し、特別支援教育の指導・能力向上に努めてほしい。 	○校内就学指導委員会を計画的に持ち、児童の実態に応じた就学を提案する。 ○校内就学指導委員会までに巡回相談を設定し、専門的な意見が反映できるようにする。 ○巡回相談を受けた児童の実態や支援内容については、情報を教職員で共有し、連携できるように、閲覧できる環境を整える。
保幼小中連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。					
保幼小中連絡会、小中連絡会、体験入学の際など、校種間の円滑な接続に向け、教育内容、効果的な支援などについての交流に努めた。					

評定（達成度）の目安 A(目標を上回る達成)：95%以上 B(目標を達成または概ね達成)：80%以上 95%未満 C(目標を達成せず)：50%以上 80%未満 D(目標を大きく達成せず)：50%未満

<令和2年度の「自己評価」と「学校関係者評価」の評価基準について>

令和2年度はコロナ禍の中で教育活動となり、例年行っていることができなかったり、多くの制約や制限を受けました。教職員による「自己評価」は、例年行っている取り組みや内容を基準に評価を実施していますが、「学校関係者評価」は、今年度実施できたことや制限の中で工夫しながら実践できたことについて評価を実施しました。